同夜前記の時間より引揚げたるも四十分の後は全社の社員自ら鑵を焚き總ての仕事を執って代りし等の事情判明して思はざる人騒がせをさせもらかと呆氣を取らる。

之より先本日午後四時總同盟関西聯合會の藤岡文六九州より帰途立寄り午後五時三十分発土佐丸にて和歌山へ向出発せる由、

扶書（寫其二）

早く整理を追加せられよ、不良職工多々ある、善良職工としては満足を得つゝあり、団体の氣勢は降下せり、氣勢をあげるは首切られた職工のみ、善良職工としては一團体となりつゝあり　整理を早く安定を計られたし。

二十七日　一職工

かゝる扶書は益々増加し其氏名等をも記載せるあり。

二十八日

第五回會見、調停者、職長代表と、午後二時半より。

會社側　工場長　笹子　謹氏　主事兼事務部長　竹内十一郎氏

造機部長　西牧忠治氏　庶務課長　山崎政男氏

職長代表　浜田喜平氏　野呂儀三郎氏　吉川卓爾氏　安藤文藤氏

串畑豊吉氏

笹子氏　何か名案があったかね。

串畑豊氏　ありません、熱値の安い處が何かするも悪ふするならんものですから、あつさりした處で御願ふ来ました。

笹子氏　アソーか、実は祝日の近づいて居る今日、其奉祝日も爭議の内に過す事は國民をも申訳無い次第であるが、然し一時の青臭張りではいかぬ、全家を能く熟慮せねばならん事である。

で話は職人の處も判って居る、解雇した者だけは成って居たと思ふ、例の解雇手當であるが此れは社會問題である。然し會社が金を出さうと言ふ事は解雇した家族が可愛想だから旅費をも出さうと云ふのである、全家を考へて戴きたい、解雇者其人ばかりなくて其人達の家族――即ち社會を救済す